学年、性別ごとに、被験者の行為・体験と自尊感情の下位尺度との相関を調べた（表6）。「自己肯定感情」は中学１年生の女性と中学３年生の犯罪行為と負の相関が認められたが、他の被験者の行為・体験に影響を及ぼしていない。「自己改善感情」は中学１年生、中学３年生の逸脱行為、被害体験、被害不安と正の相関が認められたが、それより上の学年では相関が認められなかった。「両親に対する偽りの自己の感情」は中学１年、中学３年の主に逸脱行為と正の相関が認められたが、それより上の学年ではほとんど相関が認められなかった。「友人に対する偽りの自己の感情」は大学１年生の男性の不良行為と負の相関が認められたが、他との相関は認められなかった。

**表6　自尊感情の下位尺度と被験者の行為・体験との相関**

| | | 男性 | | | | 女性 | | | |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | | 不良行為 | 犯罪行為 | 被害体験 | 被害不安 | 不良行為 | 犯罪行為 | 被害体験 | 被害不安 |
| 中学1年 | 自己肯定 | 0.07 | 0.05 | 0.02 | −0.02 | −0.17 | −0.27 | −0.03 | 0.02 |
| | 偽り友人 | 0.10 | 0.01 | 0.12 | 0.08 | −0.11 | 0.08 | 0.06 | −0.05 |
| | 偽り両親 | 0.17 | 0.07 | −0.01 | −0.04 | 0.14 | 0.44 | 0.13 | −0.09 |
| | 自己改善 | 0.18 | 0.04 | 0.46 | 0.29 | 0.25 | 0.31 | 0.11 | 0.24 |
| 中学3年 | 自己肯定 | −0.01 | −0.17 | 0.01 | −0.06 | −0.15 | −0.21 | 0.08 | 0.02 |
| | 偽り友人 | 0.02 | 0.13 | −0.04 | 0.11 | −0.06 | 0.12 | 0.11 | 0.06 |
| | 偽り両親 | 0.29 | 0.25 | 0.27 | 0.03 | 0.16 | 0.11 | −0.04 | −0.06 |
| | 自己改善 | 0.13 | 0.22 | 0.12 | 0.31 | 0.22 | 0.36 | 0.25 | 0.24 |
| 高校2年 | 自己肯定 | 0.14 | −0.09 | 0.12 | 0.11 | 0.03 | 0.10 | 0.00 | −0.04 |
| | 偽り友人 | −0.14 | −0.02 | −0.11 | 0.03 | −0.13 | −0.11 | −0.13 | −0.03 |
| | 偽り両親 | 0.04 | 0.01 | 0.10 | −0.01 | 0.05 | −0.07 | 0.05 | 0.10 |
| | 自己改善 | −0.04 | 0.08 | −0.03 | 0.03 | 0.08 | −0.03 | 0.14 | 0.14 |
| 大学1年 | 自己肯定 | 0.18 | −0.04 | 0.16 | −0.04 | 0.12 | 0.21 | 0.09 | 0.06 |
| | 偽り友人 | −0.20 | 0.08 | 0.06 | 0.12 | 0.00 | 0.08 | −0.02 | 0.06 |
| | 偽り両親 | 0.06 | 0.05 | −0.01 | 0.16 | 0.19 | −0.04 | −0.08 | −0.01 |
| | 自己改善 | −0.05 | 0.04 | 0.01 | 0.10 | 0.02 | 0.04 | 0.15 | 0.08 |

一般に自尊心を高めることは青年が不良行為や犯罪行為を犯すことを防ぐ方法と言われるが、本研究では「自己肯定感情」と逸脱行為の明白な関係は見いだされなかった。また青年期前期においては、両親との関係が不良行為、犯罪行為に影響を及ぼす可能性がある。友人との関係は、不良行為、犯罪行為に直接的影響を及ぼすかどうか明確ではない。

### ３．自尊感情と個別領域の自己評価の関係

不良行為経験の高さによって個別領域の重要性には差異があったが、一般に自尊感情は重要な領域の自己評価と密接に結びついていると考えられる。これを確認するために、不良行為の経験の多少ごとに自尊感情の下位尺度と個別領域の自己評価の相関

を調べた（表７、表８）。

表7　自尊感情の下位尺度と個別領域の自己評価の相関(男性)

| 不良行為 | | 知的能力 | 社交性 | 運動能力 | 容貌 | 優しさ | 信頼 | まじめさ | スタイル |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 少群 | 自己肯定 | 0.12 | 0.36 | 0.32 | 0.50 | 0.41 | 0.47 | 0.35 | 0.42 |
| | 偽り友人 | 0.13 | −0.32 | −0.14 | −0.15 | −0.18 | −0.32 | −0.16 | −0.15 |
| | 偽り両親 | 0.00 | −0.14 | −0.06 | −0.03 | −0.27 | −0.20 | −0.28 | 0.04 |
| | 自己改善 | 0.04 | −0.14 | 0.10 | 0.06 | 0.08 | −0.02 | −0.02 | 0.01 |
| 中群 | 自己肯定 | 0.27 | 0.32 | 0.40 | 0.47 | 0.48 | 0.53 | 0.37 | 0.51 |
| | 偽り友人 | 0.00 | −0.32 | −0.17 | −0.11 | −0.12 | −0.26 | −0.11 | −0.23 |
| | 偽り両親 | −0.02 | −0.01 | −0.10 | 0.00 | −0.13 | −0.08 | −0.09 | −0.04 |
| | 自己改善 | −0.08 | −0.13 | −0.02 | −0.10 | 0.01 | −0.07 | −0.03 | −0.14 |
| 多群 | 自己肯定 | 0.30 | 0.47 | 0.24 | 0.33 | 0.51 | 0.39 | 0.32 | 0.36 |
| | 偽り友人 | 0.02 | −0.34 | −0.34 | −0.07 | −0.20 | −0.17 | −0.10 | −0.07 |
| | 偽り両親 | −0.15 | −0.18 | −0.18 | −0.11 | −0.25 | −0.23 | −0.09 | −0.19 |
| | 自己改善 | −0.11 | −0.10 | −0.10 | −0.11 | −0.19 | −0.08 | 0.06 | −0.12 |

表8　自尊感情の下位尺度と個別領域の自己評価の相関(女性)

| 不良行為 | | 知的能力 | 社交性 | 運動能力 | 容貌 | 優しさ | 信頼 | まじめさ | スタイル |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 少群 | 自己肯定 | 0.40 | 0.42 | 0.37 | 0.46 | 0.36 | 0.49 | 0.38 | 0.38 |
| | 偽り友人 | −0.11 | −0.35 | −0.13 | −0.17 | −0.18 | −0.31 | 0.01 | −0.19 |
| | 偽り両親 | −0.02 | −0.08 | −0.03 | −0.02 | −0.08 | −0.15 | −0.10 | −0.04 |
| | 自己改善 | −0.14 | −0.24 | −0.02 | −0.09 | −0.10 | −0.11 | 0.06 | −0.15 |
| 中群 | 自己肯定 | 0.01 | 0.32 | 0.29 | 0.30 | 0.48 | 0.45 | 0.29 | 0.28 |
| | 偽り友人 | 0.22 | −0.38 | −0.24 | −0.02 | −0.31 | −0.25 | 0.02 | −0.09 |
| | 偽り両親 | −0.02 | −0.01 | −0.12 | −0.04 | −0.17 | −0.19 | −0.09 | −0.13 |
| | 自己改善 | 0.01 | −0.06 | −0.15 | −0.14 | −0.12 | −0.10 | 0.21 | −0.19 |
| 多群 | 自己肯定 | 0.43 | 0.26 | 0.22 | 0.37 | 0.33 | 0.46 | 0.25 | 0.29 |
| | 偽り友人 | 0.07 | −0.31 | −0.20 | −0.04 | −0.08 | −0.28 | 0.03 | −0.07 |
| | 偽り両親 | 0.09 | −0.07 | −0.17 | −0.05 | −0.17 | −0.13 | 0.00 | −0.08 |
| | 自己改善 | −0.14 | −0.02 | −0.16 | −0.13 | −0.07 | −0.22 | −0.01 | −0.09 |

「自己肯定感情」はすべての領域と高い正の相関が認められた。領域によって相関係数の大きさは異なっていたが、性別や不良行為の経験の多少によって異なる重要な領域において、自己評価と「自己肯定感情」の相関が大きいという結果は認められなかった。ただし全体として、不良行為の経験の少ない被験者の方が「自己肯定感情」と各領域の自己評価の相関が大きかった。また「友人に対する偽りの自己の感覚」と「社交性」、「信頼」の自己評価の間には負の相関が認められた。一方、「両親に対する偽りの自己の感覚」と「自己改善願望」は個別領域の自己評価とはほとんど相関は認められなかった。

## 4．まとめ：逸脱経験・被害体験・被害不安と自己評価・自尊感情

（1）不良行為の経験

不良行為の経験の多少による自己評価ならびに自尊感情の差異について、これまで述べてきた結果をまとめると、以下のようになる。

1.不良行為の経験が多い被験者は少ない被験者に比べて、「容貌」や「スタイル」といった外見に関する領域や「社交性」や「友人からの信頼」といった友人関係に関する領域を重視し、「まじめさ」を軽視していた。

2.不良行為の経験が多い被験者は少ない被験者に比べて、「社交性」、「運動能力」、「容貌」といった領域の自己評価が高く、「まじめさ」や「知的能力」といった領域の自己評価が低かった。

3.不良行為の経験が多い被験者は少ない被験者に比べて、「両親に対する偽りの自己の感覚」を感じていた。この傾向は特に中学１年生と３年生で認められた。

4.不良行為の経験が少ない被験者は多い被験者に比べて、「友人に対する偽りの自己の感覚」を感じる傾向があった。この傾向は特に大学１年生の男性で認められた。

5.中学１、３年生の不良行為の経験が多い被験者は少ない被験者に比べて、「自己改善願望」が強かった。

個別領域の重要性の高さとその領域の自己評価の高さは一致する傾向が認められている。不良行為の経験が多い被験者は「容貌」、「社交性」の重要性が高く、同時に自己評価が高い。不良行為の経験が少ない被験者は「まじめさ」の重要性が高く、同時に自己評価が高い。自分の価値を置いている領域に対して自己高揚的に自己評価を歪めて高く評価しているのか、それとも自己評価が高い領域の重要性を自己高揚的に高く、自己評価が低い領域の重要性を自己防衛的に低く認知しているのか、その方向性は明らかではないが、実際にはその両方が相互作用的に生じていると考える方が現実的であろう。このような自己高揚的、自己防衛的認知は不良行為の経験とは関係なく生じていると考えられる。

不良行為の経験が多い被験者の「社交性」や「友人からの信頼」に対する高い自己評価と「友人に対する偽りの自己の感覚」の低さは対応しており、いずれも友人関係の良好さを指摘するものである。この傾向は大学１年生の男性で顕著であった。不良行為の経験は学年が進むにつれて増加し、大学１年生の男性では経験の多い（13 点

以上）被験者は過半数を超えている（第２章)。先にも述べたとおり、今回の調査で用いられた不良行為の測度は友人と一緒に行われる行為が多く含まれていることを考慮すると、大学生ではこのような経験の少ない被験者がむしろ友人関係が良好でない、あるいは友人の数が少ないことを示しているかもしれない。

（２）犯罪行為の経験

犯罪行為の経験の有無による自己評価ならびに自尊感情の差異について、これまで述べてきた結果をまとめると、以下のようになる。

1.犯罪行為の経験が多い被験者は少ない（無い）被験者に比べて、「容貌」や「スタイル」といった外見に関する領域を重視し、「まじめさ」を軽視していた。

2.犯罪行為の経験が多い被験者は少ない（無い）被験者に比べて、「運動能力」の自己評価が高い傾向があり、「まじめさ」や「知的能力」といった領域の自己評価が低かった。

3.犯罪行為の経験が多い被験者は少ない（無い）被験者と比べて、「自己改善願望」が強かった。この傾向は特に中学１年生の女性と中学３年生で認められた。

4.中学１年生の女性と中学３年生の男性において、犯罪行為の経験が多い被験者は少ない（無い）被験者と比べて、「両親に対する偽りの自己の感覚」を感じていた。

5.中学１年生の女性と中学３年生の女性において、犯罪行為の経験が多い被験者は少ない（無い）被験者と比べて、「自己肯定感情」が低かった。

犯罪行為の経験の有無による個別領域の重要性評定および自己評価は、不良行為の経験の結果と類似している。「自己改善願望」、「両親に対する偽りの自己の感覚」との関係も不良行為の経験の結果とほぼ対応しており、中学１年生および３年生では犯罪行為の多い被験者は、両親との関係が良好ではなく、自分を変えたいという願望を持っているが、高校以降ではそのような結果は認められなかった。ただし「友人に対する偽りの自己の感覚」では、不良行為の経験の結果とは異なり、友人関係のあり方が不良行為をする者と犯罪行為まで犯す者では異なる可能性が示唆された。

（3）被害体験

被害体験の有無による自己評価ならびに自尊感情の差異について、これまで述べてきた結果をまとめると、以下のようになる。

1.被害体験が多い被験者は少ない（無い）被験者に比べて、「容貌」を重視していた。

2.被害体験が多い被験者は少ない（無い）被験者に比べて、「自己改善願望」が強かった。

自己評価、自尊感情との明確な関係は認められなかった。

（4）被害不安

被害不安の高低による自己評価ならびに自尊感情の差異について、これまで述べてきた結果をまとめると、以下のようになる。

1.被害不安の高い被験者は低い被験者に比べて、「スタイル」を重視していた。

2.被害不安の高い被験者は低い被験者に比べて、「自己改善願望」が高かった。この傾向は特に中学１年生、中学３年生で認められた。

こちらも被害者経験同様に、自己評価、自尊感情との明確な関係は認められなかった。

## 5　引用文献

伊藤美奈子　1993　個人志向性・社会志向性に関する発達的研究　教育心理学研究，**41**，293-301.

伊藤忠弘　1999　社会的比較における自己高揚傾向　－平均以上効果の検討－　心理学研究，**70**，367-374.

諸井克英　1985　高校生における孤独感と自己意識　心理学研究，**56**，237-240.

落合良行　1989　青年期における孤独感の構造　風間書房

Rosenberg,M　1965　*Society and the adolescent self-image.*　Prinston Univ. Press.